

令和7年度第1回学校関係者評価委員会（柔道整復学科）議事録

【日時】 令和7年9月18（木） 14:00～15:00

【場所】 日本医学柔整鍼灸専門学校 ZOOM 開催

【出席】 委員 田村 嘉悠（有限会社ヒーリング・スポット 代表取締役）
高橋 功（株式会社 SEA Global 取締役副社長）
宗澤 岳史（株式会社 Assatte 代表取締役）
加瀬 剛（キネシオ接骨院 院長）
小林 篤史（株式会社ボディスプラウト 代表取締役）

学校 岸本 光正（校長）
天野 陽介（鍼灸学科 学科長）
中村 幹佑（教務委員長・鍼灸学科教員）
森下 友雄（柔道整復学科 学科長）
青木 春美（入試広報委員長）
野々山 卓敬（柔道整復学科 教員）

事務局 中島 桂吾（事務局 次長）
森山 晃義（入試広報課 マネージャー）
相馬 しのぶ（入試広報課 課長）
山田 詩子（総務経理課 課長代理）
中尾 好伸（教学マネジメント推進課 マネージャー）
大浦 崇（教学マネジメント推進課 課長）
兼子 啓太郎（教学マネジメント推進課 課長代理）
木村 元（教学マネジメント推進課 職員）
楠本 剛浩（教学マネジメント推進課 職員） 議事録

以上 20 名

【議題】 日本医専の現状と取り組みについて

○内容

社会人学生の増加に伴い、これからの多様な学びに対応するため、[KEISHIN.net](https://www.keishin.net) を活用したオンデマンド学習コースを新設する予定であることを報告した。
また、職業教育における本校の取り組みである以下4点の紹介を行った。

- ・臨床実習
- ・カラデミア
- ・独立開業ゼミ
- ・産学連携

○委員からの意見

〈臨床実習について〉

- ・臨床実習に来ている学生の中でも高卒性の学生より40代のほうが礼儀などはしっかりしている。
- ・取り組む姿勢が昨年度と比べるとかなり改善されている。
学校で何か取り組んだことはあるのか。
臨床実習を受け入れている現場ではなるべく患者様へ触れる機会を設けている。
- ・コミュニケーションに慣れていない場合は子供と接する方が養う練習になる。

〈カラデミア〉

- ・学生のうちから実際に患者様に触れる機会が多くなるのは素晴らしいこと。
その中でコミュニケーション力や経営に関して学べればいいのではないかと。

いい取り組みなのでこれからの継続して欲しい。
学生のうちから患者様と接する機会となっている。

〈独立・開業について〉

- ・ミドルシニア層が増えキャリアアップや開業などで入学しているのであれば技術だけではなく集客方法/開業方法/専門技術外の事もスキルアップできるよう支援をすれば差別化ができるのではないか。

〈その他意見〉

- ・学校が色々なことに取り組んでいる印象をすごく感じている。
いいことは残し、新しい事に取り組む姿勢がいい。
- ・オンデマンドやAIを用いた個別カスタマイズを今後どう強化していくかが重要。
- ・鍼灸学科の募集がうまくいっている要因はなにか、柔道整復学科が苦戦している原因は何か。

→ブレンデッド教育を継続していることや他校にない4大ゼミなどを展開している事。

社会全体的に鍼灸に可能性を感じている方が多い。

多方面の働き方が出来るのではと考えている方が多い。

卒業生の満足度が高く、紹介で入学する学生が多い。

柔道整復が画家は昼間部が苦戦している。内部要因は合格率、

外部要因はスポーツトレーナーや理学療法へ道を選んでしまう。

夜間部に関しては対面ではなくオンライン授業を開設していることで集客が出来ている。

出口が不透明なことも大きな要因になっているので明確にしていく。

以上

令和 7 年度 第 1 回学校関係者評価委員会（鍼灸学科）議事録

【日時】 令和 7 年 9 月 16 日（火） 14:00～15:00

【場所】 日本医専（オンライン開催）

【出席】 委員 武内 潔（公益社団法人東京都鍼灸師会 監事）
辻内 敬子（女性鍼灸師フォーラム 代表）
寺裏 誠司（株式会社学び 代表取締役社長）
野村 森太郎（公益社団法人東京都鍼灸師会 副会長）
前田 真也（カリスタ株式会社 代表取締役）
藤原 良次（株式会社アールエフ 代表取締役社長、本校校友会 会長）

学校 岸本 光正（校長）
天野 陽介（鍼灸学科 学科長）
中村 幹佑（教務委員長・鍼灸学科 教員）
森下 友雄（柔道整復学科 学科長）
青木 春美（入試広報委員長・鍼灸学科 教員）
野々山 卓敬（柔道整復学科 教員）
事務局 中島 桂吾（事務局 次長）
森山 晃義（入試広報課 マネージャー）
相馬 しのぶ（入試広報課 課長）
山田 詩子（総務経理課 課長代理）
中尾 好伸（教学マネジメント推進課 マネージャー）
大浦 崇（教学マネジメント推進課 課長）
兼子 啓太郎（教学マネジメント推進課 課長代理）
木村 元（教学マネジメント推進課 職員）
鈴木 慶紀（教学マネジメント推進課 職員）

以上 21 名

【議題】 日本医専の現状と取り組みについて

○内容

社会人学生の増加に伴い、これからの多様な学びに対応するため、KEISHIN.net を活用したオンデマンド学習コースを新設する予定であることを報告した。また、職業教育における本校の取り組みである以下 4 点の紹介を行った。

- ・ 臨床実習
- ・ カラデミア
- ・ 独立開業ゼミ
- ・ 産学連携

○委員からの質問・意見

(1) 取り組みに対するブラッシュアップ

<意見 1 オンデマンドコースについて>

学習のみの活用だけではなく、学生同士・卒業生・教職員が繋がるコミュニティ作りのツールがあると、オンデマンド学習の環境下でもモチベーションの維持・向上や中退率防止になるのではないかと。

<回答 1>

今後は日本各地から入学者が増加すると予測している。
現在、グループ校が進めているメタバースを活用した教育プログラムの転用を検討している。KEISHIN.net 内で、コミュニティを形成したり、勉強会ができたりするコンテンツ作成を検討していく。

＜意見2 デュアル教育について＞

学生主体で運営するリラクゼーションサロンであるカラデミアにおいて、そこで学んだ学生が、下級生に教えていく取り組みも良いのではないか。

＜回答2＞

カラデミアは2年目を迎え、徐々にそのような取り組みになってきている。
また、カラデミアだけでなく、学生運営する地域密着型のスクール「CLUB-ISEN」を立ち上げることが経営承認され、様々な経歴やスキルを持つ学生や卒業生が、その特技を活かして、地域に還元したりする取り組みを開始する予定としている。

(2) 今後キャリア教育に期待すること

30~50代の方で社会人経験を経て、キャリアチェンジする学生は、コミュニケーション能力が高く、物事に対する考えが確立しているが、それ故にこだわりが強い傾向があるため、素直さや柔軟性を持てるようなマインドセットの要素があるカリキュラムの構築を期待する。

以上

令和7年度第2回学校関係者評価委員会(柔道整復学科)議事録

【日時】令和8年1月29日(木) 14:00～15:00

【場所】日本医専(オンライン開催)

【出席】委員 加瀬 剛 (キネシオ接骨院 院長)
小林 篤史 (株式会社ボディスプラウト 代表取締役)
田村 嘉悠 (有限会社ヒーリング・スポット 代表取締役)
高橋 功 (株式会社 SEA Global 取締役副社長)
宗澤 岳史 (株式会社 Assatte 代表取締役)

学校 岸本 光正 (校長)
天野 陽介 (鍼灸学科 学科長)
中村 幹佑 (教務委員長・鍼灸学科 教員)
森下 友雄 (柔道整復学科 学科長)
青木 春美 (入試広報委員長・鍼灸学科 教員)
野々山 卓敬 (柔道整復学科 教員)
事務局 中島 桂吾 (事務局 次長)
山田 詩子 (総務経理課 課長代理)
森山 晃義 (入試広報課 マネージャー)
相馬 しのぶ (入試広報課 課長)
中尾 好伸 (教学マネジメント推進課 マネージャー)
兼子 啓太郎 (教学マネジメント推進課 課長代理)
木村 元 (教学マネジメント推進課 職員)
伊藤 裕 (教学マネジメント推進課 職員)

以上 23 名

【議題】日本医専が目指すもの・新たな取り組み

【取り組み 01】学修者主体の学びの実現・学生の「声」を反映する仕組み

○内容

学生主体の学びの実現のため、大きく以下3点の変化について紹介を行った。

- ①教育(教学)のあり方
受益者側の視点へ
- ②学校のあり方
実習や自習、コミュニケーションの場の充実
学生の声を授業/教学/経営に活かす
例)・KEISHIN Voice
・パートナーズチューデント
・リアクションペーパー
- ③教員と学生の関係性
知識を一方向的に与えるのではなく、共に学びをつくるパートナーとなり、
内発的な学びの動機づけを高めることで主体性を伸ばす。

【取り組み 02】オンラインスクール「KEISHIN アカデミー」

○内容

学校の授業とは違う、新しい学びの選択肢として、2026年6月開講予定の「柔道整復師」国家試験合格に特化した対策コース“KEISHIN アカデミー”の紹介を行った。

学内で導入している KEISHIN.net を利用し、学外で既に就労されている方等を対象としたサービスで、少ない時間でも受講しやすい時間数・カリキュラム構造・アウトプットの仕組み等の工夫をしている。

個人だけでなく、法人における社員教育の一貫としても活用いただけるようなダッシュボードも開発。法人と意見交換をするメル中で、企業側の要望も取り入れつつある。

○委員からの質問・意見

①委員より質問

自社でも年に2回、匿名で社員の声を聴くアンケートを実施し、理由とともに回答している。KEISHIN VOICE を実施した結果、どんな意見が上がっており、どういった改善を行っているのか。

<医専より回答>

学生からの要望の声が多かったのは以下3点。

- 設備・施設: 自習スペースが少ない。校舎が小さいなど
- オンライン授業: オンライン上のコミュニケーションをもっととれるようにしてほしい
- キャリア支援: 就職情報の充実だけでなく、アルバイト情報や独立開業の情報を充実させてほしい

→現在この3点を認識したうえで改善に向けてアクションプランを組んでいる状況。

→学生に対し、校長より校長メッセージとして動画を配信する形で2月頭に回答するとともに、数値の公表も行う予定。

→校長より実際の数値も開示し報告を行った

②委員より質問

KEISHIN VOICE の回答の傾向は昼間部と夜間部の学生で違いはあるか

<医専より回答>

学科別では鍼灸学科より柔道整復学科の方がややスコアが悪い

昼間部ではオンライン上のコミュニケーションが取りづらいという声が多かった

また、柔道整復学科においては、「この学校を他社に紹介したいか」という質問のスコアが低かった。

さらにヒアリングを進めると、授業が学生に対し一方通行となっているという声があり、双方向性のある授業を進めていくなど授業の質を高めることに取り組んでいきたい。

③医専より質問

学習者主体の学びの実現を目指して取り組みを進めて来ているが、報告を受け総論的なご意見をいただきたい。

<委員より質問>

学生主体の学びにシフトしていく中で、学生同士で関わりあう場面はどの程度あるか

<医専より回答>

- ・「学びシェア」と銘打ち、学生の学び方や進め方を学生間でシェアする取り組みを行っている
- ・部活動で上級生と下級生が参加し交流を図っている
- ・料理教室も開催しており
- ・1年生主催で勉強会を実施しており、10~20名の学生が参加している
- ・メタバースも来年度から取り入れようとしている

<委員より回答>

- ・バーチャルキャンパスについては運用に苦労しているところが多い
- ・学生が自発的に学習をしていく仕組みを作っていくのが重要

④医専から質問

- ①「学習者主体の学び」について数年前に講義していただいたが、その時と比べてさらにアップデートした部分はあるか
- ②オンラインやICT 技術を通じて学生とコミュニケーションを取る方法としては、現在ではどのように進化した取り組みをしているか

<委員より回答>

まず前提として、講義された内容を自分の血肉にしていくには独学で学び直していくことが必要と認識している。いかに独学をさみしくなく、かつモチベーションを保ちながら続けられるかが重要で、そのために ICT 技術やネットワークを活用している。

独学は基本的に孤独なものなので、悩みや苦しみをネットワークでシェアする機会を作ることを大事にしている。バーチャルキャンパスも一助となる。

教職員側がスキマ時間を活用し、オンラインで質疑応答を受けられる時間を多く用意し、学生と交流する機会を設けて、受講生に可視化している。

ICT 技術を使ってはいるが、重要なのは時間を作って話を聞くなど地道な活動が重要。

学生からの悩み相談や将来の不安に対応できるスタッフ育成を進めている。

フィードバックも重要で、相談に対するアドバイスの質と時間の担保のため、AI を活用しており、プロンプトを教職員間で共有している

以上

令和7年度第2回学校関係者評価委員会(鍼灸学科)議事録

【日時】令和8年1月27日(火) 14:00～15:00

【場所】日本医専(オンライン開催)

【出席】委員 武内 潔 (公益社団法人東京都鍼灸師会 監事)
辻内 敬子 (女性鍼灸師フォーラム 代表)
寺裏 誠司 (株式会社学び 代表取締役社長)
野村 森太郎 (公益社団法人東京都鍼灸師会 副会長)
前田 真也 (カリスタ株式会社 代表取締役)
藤原 良次 (本校校友会 会長)

学校 岸本 光正 (校長)
天野 陽介 (鍼灸学科 学科長)
中村 幹佑 (教務委員長・鍼灸学科 教員)
森下 友雄 (柔道整復学科 学科長)
青木 春美 (入試広報委員長・鍼灸学科 教員)
野々山 卓敬 (柔道整復学科 教員)
事務局 中島 桂吾 (事務局 次長)
山田 詩子 (総務経理課 課長代理)
森山 晃義 (入試広報課 マネージャー)
相馬 しのぶ (入試広報課 課長)
舘ヶ沢 拓 (入試広報課 職員)
中尾 好伸 (教学マネジメント推進課 マネージャー)
兼子 啓太郎 (教学マネジメント推進課 課長代理)
久保田 裕紀子 (教学マネジメント推進課 職員)
木村 元 (教学マネジメント推進課 職員)
伊藤 裕 (教学マネジメント推進課 職員)

以上 23 名

【議題】日本医専が目指すもの・新たな取り組み

【取り組み 01】学修者主体の学びの実現・学生の「声」を反映する仕組み

○内容

学生主体の学びの実現のため、大きく以下3点の変化について紹介を行った。

①教育(教学)のあり方

受益者側の視点へ

②学校のあり方

実習や自習、コミュニケーションの場の充実

学生の声を授業/教学/経営に活かす

例)・KEISHIN Voice

・パートナーズチューデント

・リアクションペーパー

③教員と学生の関係性

知識を一方向的に与えるのではなく、共に学びをつくるパートナーとなり、
内発的な学びの動機づけを高めることで主体性を伸ばす。

【取り組み 02】オンラインスクール「KEISHIN アカデミー」

○内容

学校の授業とは違う、新しい学びの選択肢として、2026年6月開講予定の「柔道整復師」国家試験合格に特化した対策コース“KEISHIN アカデミー”の紹介を行った。

学内で導入している KEISHIN.net を利用し、学外で既に就労されている方等を対象としたサービスで、少ない時間でも受講しやすい時間数・カリキュラム構造・アウトプットの仕組み等の工夫をしている。

個人だけでなく、法人における社員教育の一貫としても活用いただけるようなダッシュボードも開発。今後鍼灸など他の資格などへの拡大も検討中。

○委員からの質問・意見

■質問1

学校が向かおうとしている方向性や重点として取り組もうとしていることについて、まずは総論的にご評価いただきたい

<回答>

「学習者主体の学び」が最も効果的であり、国としても力を入れているところであり、オンラインスクールを在学生以外にも広げる戦略は、学校経営としても素晴らしい。

アンケートを活かすという点については、インストラクションデザインの観点で、シラバス設計から学習到達目標を明確にするとよい。各授業を受けることで、何ができるようになるのかを、授業ごと・コマごと・15分毎などブレイクダウンしていくことが望ましい。リアクションペーパーのなかにも「先生から冒頭でこの授業で何ができるようになるのか明確に言われたか」「授業が終わってあなたはそれができるようになったか」を必ず入れた方がよい。

オンラインスクールにおける懸念としては、授業時間が30分は長いかもしれない。近年の研究では4～15分が定石となっており、この区切りごとにアウトプットするマイクロラーニングをぜひ取り入れてほしい。

担当教員側が短時間で解説するのが難しいという懸念もあるが、そこはAI等を活用し、シラバス設計や動画を作らせたりするなど方法論は学内でもシェアしていくとよい。

オンライン化が進むと、途中離脱や退学の多さが課題になる。退学防止に聞いていると感じているのは、横とのつながりを感じられるかが重要だと感じている。

例として、オリエンだけはあえて対面で先生やクラスメイトと行い、ゲーム性をもたせたり、その中でLINEグループをつくらせておくと、先生に言えないことも横に連絡をするようになる。ゲーミフィケーションをダッシュボードに入れるところも増えている(友達を指定して進捗を比較できるなど)。

<医専より>

一昨年から授業力向上PJでインストラクションデザインの観点で、学校側から各担当に対し、授業設計シートを使い詳細な授業設計を依頼している。リアクションペーパーにご指摘の項目は無かったため、追加検討したい。到達度をはかるという点では確認テストを設定等している。

オンデマンドコースは1動画15分にしているが、ゲーミフィケーション含めアカデミーには取り入れ切れていない部分も多々あるので今後取り入れていきたい。

また、オンラインコミュニケーションとしてメタバースも検討している。

■質問2

学校において学生の声を経営や取り組みに反映するということを鍼灸院に置き換え、お客様の声を収集・反映することについて、考え方があったり、どのように仕組化しているか、どう受け止め改善しているかなども含め、アドバイスをいただきたい。

<回答>

常時お客様アンケートを実施している。お客様のご負担とバランスをとりながらも細かく行い、数値化→分析→改善に繋げるため、特に分析にはAIもフル活用している。

学生の声を取り入れる点について、究極は本人のやる気前提になり、結果エンリーマネジメントにいきつくのではないかな。

<医専より>

学校としてはアドミッションポリシーに則り入学判定を行っているが、もう少し入学の部分でできることがあるとは考えている。

Q.数値化して対策というのはどのくらいのスパンで行っているのか？

A.常時。組織横断的に動く戦略チームが、リピート客の満足度などクロス集計等を行い、分析・改善提案を行っている。

→医専でも今後“ヨリソル(校務 BI 系ツール)”を使って、クロス集計など、より深い分析を行っていく予定。

■質問3

「問いを立てる力」は「本質を捉える」力ともいえる「本質を捉える力」を養うために、意識することや経験しておくことなどがあればお聞きしたい。

<回答>

鍼灸師会の取り組みとしては、会員自身に講習会を企画から行ってもらうということを試みている(報酬有)。仕事を知る・仲間意識を持つなどの効果がある。

■質問4

学生が患者様の小さな変化や声から「なぜだろう？」と問いを立てられるような、感性を磨くために必要なことがあればお聞きしたい。

<回答>

ご質問とはずれるかもしれないが、声の大きい学生は声を出せるが、何も発しない・言いたくも言えない学生の声を拾っていけるような、学生同士の交流・担任との関わりができるとうい。

まず、言葉を発していない学生にも目を向けるという視点が教員に必要。年齢層も幅広いので、満遍なく拾える体制づくりが必要ではないかな。

パートナーズチューデントに応募する人の声は通りやすくなってしまっていないかな。

<医専より>

パートナーズチューデントは今年度から実施したため、選べるほど応募が多かったわけではないが、極力成績・学年・学科は偏らないような選考基準にはしている。

また1年間の学校の流れにそって毎月レポートアンケート+座談会に加え、深掘りなどを行う際にも、自分だけでなく、まわりの人たちも含めてどう思っているかという形で意見をもらっている。しかし、今後より充実させていきたい。

■質問5

KEISHIN アカデミーは、国家試験対策コースにとどまらず、卒業生が新しい知識や技術をアップデートする場としても活用していければと考えている。

校友会の活動や価値向上にも繋げられるご意見やアイデアなどいただけることがあればお願いしたい。

<回答>

卒後の学生と繋がりや意見交換できるツールとして、まず KEISHIN.net というプラットフォームがあるということは、集まりやすいというメリットが考えられる。
懸念としては、オンライン学習は実技と座学であれば座学に偏りがちだが、卒後は実技ニーズの方が高いため、そのあたりうまくミックスしていけるかが考えられる。

■質問6

鍼灸師の会員の方々を管理して情報発信したり講座を開いたりされる中、アクティブな状態の会員であってもらうために、どんな工夫をなさっているかお伺いしたい。

<回答>

正直アクティブ層は一握り。地域毎でもアクティブとそうではないところは明確にわかれている。活動が少ないところを上げていくのは時間がかかるため、まずはアクティブと関わり事例を作り、できるだけ多くの媒体で広報的な動きをしている。

情報伝達が難しい層にはリアルな接触頻度をいかに増やすか。オンラインとリアルのメリットデメリットはあるので並行している。

卒業生限定の施術所マップ(在校生が話を聞きに行きやすい)など、あえてクローズドな情報があるとよいのではないか。

以上